

編集後記

初等教育に「国語科」が設置され、西欧に範をとった国語教育がスタートしたのは明治三十年、今からちょうど一世紀昔のことという。時あたかも日清、日露両戦争の狭間にあり、一流国の仲間入りを焦眉の急として、富国強兵と和魂洋才の声高らかに、我が国が日の出の勢いで猛進していた時代だった。

波瀾万丈の百年を経て、今、日本の国語教育は再び新しい世紀を迎えた。しかし、おしなべて我々はまだ世紀末的な重苦しい空気にあり、明るい期待に胸躍らせるよりも、押し寄せる不安に息を詰まらすことが多い。百年前と同様の確かな道筋は、今、我々の前には示されていない。

かくて第二十一集では、「二十一世紀の国語教育の課題」という特集テーマを掲げ、我が国百年目の国語教育の新しい課題について、ストリートに会員諸氏に問うてみた。多くの方々が、それぞれの立場から、時宜になかった問題を採り上げ、具体的に論じて下さった。ご寄稿下さった諸氏に心より御礼申し上げる。

蛇足だが、編集作業の傍ら胸に去来した思いを書き留めておきたい。それは、世の中が変化を希求したとしても、国語Ⅱことは急激な変化を拒もうとする「本能」をもつものではないか、という点である。卑近な例を挙げる。若者の言葉の乱れを中高年が批判し正そうとする社会現象がある。これは、中高年が馬齢を重ねたことの証なのではなく、実はそうすることが、共時的には世代間のコミュニケーションを保証し、通時的には祖先との対話を可能ならしめる、とても大事な民族の本能に根ざした行為なので

はないか、ということだ。

中国文化に我々が熱い視線を注がなくなつて一世紀が経つというのに、漢字や漢語がいまだに幅を利かせているのも、ことばが時代の急旋回をすぐさま反映するものではなく、五十年百年というスパンで括れぬものであることを示している。今我々が用いる国語は千年来の日本文化の、履歴書そのものなのかもしれない。

だとすれば、国語教育の使命は、ひどく単純化して言えば、我々の祖先と子孫とを結びつける唯一無二の手段を保守するという一点にのみ求められるような気がしてならない。後ろ向きな考えかもしれないが、ことばが本来過去に帰属する文化の集積であるという原点に立ち返ることも、時には必要であらう。

伝統の集積としてのことばに、石を投げつけるのは若者の特権である。いつの時代も若者がより多く知りたいのは過去ではなく、現在と未来なのだから。しかし、ものわかりよくそれを許容するのは、私見では、民族の本能に背く行為である。古典を読むことを通じて、祖先の言語空間に遡及する術を教え、揺れの少ない文章モデルの学習を通じて、世代間の断絶をより小さくしてゆくこと、それが国語教育の、今も変わらぬ使命なのではないかと思う。

新世紀を迎えた今、前途多難な雲行きに圧せられて、我々ですら過去を振り返ることを忘れてはいないだろうか。国語は我々の来し方を振り返る装置として今も重要な役割を担っている。そして、我々が日本人であることを捨て去るその時まで、確実にその役を担うはずだ。だから、時代が大きくうつねろうとする今こそ、ことばという伝統を頑なに保守する姿勢が、国語教育に携わる我々に、とりわけ強く求められている気がするのである。

(内山精也)

早稲田大学国語教育研究 第二十一集

二〇〇一年三月三〇日発行

発行所

早稲田大学国語教育学会

代表

中野幸一

東京都新宿区西早稲田一六六一

早稲田大学教育学部内

振替〇〇一六〇一一八五二七番

印刷所

株式会社 恵友社

東京都千代田区飯田橋四一五十三